



Title	ポストソ連期グルジアにおける政党の意味：下野後の統一国民運動UNMの検討を中心に
Author(s)	立花, 優
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 34-35
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.34
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88349">http://hdl.handle.net/2115/88349</a>
Type	article
File Information	JB014_007tachibana.pdf



[Instructions for use](#)

## ポストソ連期グルジアにおける政党の意味 — 下野後の統一国民運動UNMの検討を中心に —

立花 優

グルジアで2012年に実施された議会選挙では、当時の与党統一国民運動 (UNM) が野党連合グルジアの夢 (GD) に敗北し、UNM がその選挙結果を認めて政権を明け渡した。ソ連崩壊後のグルジアにおいて、初めて選挙によって政権交代が実現したという点でこの選挙は歴史的・画期的なもの・グルジアの民主化を促すものと評価された。しかしより注目すべきなのは、旧与党 UNM が強固な野党第一党として選挙後もグルジア政治に一定期間残存したことである。ポストソ連期グルジアにおいては、旧政権与党が政権崩壊後も一定の勢力を保ってグルジア政治に影響を持ち続けることはなかった。さらに、与党との間で政権をめぐる競争が十分可能な、安定した組織を持つ野党が存続することもなかった。グルジア政治の民主度を分析するにあたっては、これらのことこそ重要ではないか。そこで本報告では、政権交代した2012年議会選挙の前後の旧与党 UNM の動きを検討し、ポストソ連期グルジアにおける競争可能な、持続的な野党の存在について考察した。

報告ではまず2012年選挙までのUNM 政権の状況を整理し、そのうえで2011年末のGD の登場後、グルジアにおける政治情勢がどのように変化したのかを概観した。2012年までのUNM 政権は、2003年の「バラ革命」直後は民主的なイメージがあったものの、徐々に強権的な姿勢を露わにし始めた。民主制の確立よりも国家建設を優先順位の上位に置いたUNM 政権は、分裂しまとまりを欠いた野党の状態(競争可能な野党の不在)にも助けられ、党派的な安泰を誇っていたのである。この状況が変化したのが、2011年のGD 結成であった。かつてのUNM 大口支援者であったイバニシュヴィリによる競争可能な野党ブロックの形成はUNM にとって脅威となった。

次に、政権交代が起きた2012年選挙の結果を概観し、結果が持つ意味を指摘した。2012年選挙ではUNM とGD の議席は比例割り当て分・小選挙区ともに伯仲し、GD が計85議席、UNM が計65議席でこの2党で全議席を占めることになった。すなわち、ポストソ連期グルジアにおいて、初めて「2大政党」時代とも言える状況が出現したのである。UNM は敗北したものの、「野党第一党」として次の議会選挙で政権を奪還し得る位置を占めることとなった。

第3に、上記のような状況の下で、UNMがどのような展望を持っていたのかを検討した。報告では、2016年2月にUNM所属国会議員(当時)に対して報告者が行ったインタビューから、UNMが当時抱いていた次期選挙に向けた展望を考察した。ここで、UNMが党内予備選挙を通じ、次期議会選挙に向けて新たな候補者の選定を進めていたこと、党の創設者であり指導者であったサアカシュヴィリ前大統領のウクライナ政界への転身後、主要幹部が「脱サアカシュヴィリ化」を進めようとしていたことを明らかにした。また、UNMが「選挙で負けても党を維持できること」をこれまでの与党との違いとして自己認識していたことも明らかとなった。一方、同時期に報告者が行ったGD幹部へのインタビューからは、GDが2012年の議会選挙において政権交代を実現するため「勝てる候補」の擁立を優先したこと、「反UNM・サアカシュヴィリ」の一点でまずは糾合したGDを、2012年以降の選挙の中で政党組織へと脱皮させようとしてきたことが明らかにされた。

2012年以降、次の議会選挙が実施される2016年までは、前述のようにGDとUNMの2大政党が支持を競う構図となった。複数行われた世論調査の中には、UNMの支持率がGDに肉薄する結果となったものもあった。しかし実際の選挙は小選挙区でUNMが全敗し、GDが計115、UNMが27という一方的な結果に終わった。報告では、この選挙ののちUNMが分裂していく過程を取り上げ、グルジアにおいて「競争可能な野党」が弱体化していることを指摘した。すなわち、選挙結果に対するUNMの対応について結果をボイコットするよう求めるサアカシュヴィリの国外からのメッセージをめぐり、UNMは当時の執行部ほか幹部のほとんどが離党、一方で党組織の大部は親サアカシュヴィリ路線で残存することになったのである。この分裂の結果、次点候補の惜敗率低下に見られるようにGDに対する野党の競争力は著しく低下することとなった。また、この分裂劇はUNMがサアカシュヴィリの個人政党的な性格を強く有していたことを晒す結果となった。

以上のように、2012年議会選挙以降のグルジアでは、政権与党と競争可能な野党が(旧与党という性格を有しているにもかかわらず)持続的に存在するかに見えたが、2016年議会選挙後の状況は「競争可能な野党の弱体化と与党の総取り」状態となっている。このことは、グルジアにおける民主制の安定にとって決してプラスとなるものではない。

(北海道大学)